

キリスト教初期修道制における悪霊論

鈴木 順

導入

4世紀のキリスト教修道制の勃興は、古代末期地中海世界宗教史において最も特徴的な現象の一つである。都市や村落という在来の共同体の人的紐帯から離脱し、砂漠や荒野へと分け入って修行する修道者たちは何を目指したのか、即ち彼らの禁欲の動機とは如何なるものであったのか。本稿⁽¹⁾はキリスト教初期修道制における修道者たちの禁欲論と不可分の悪霊論を分析の手がかりとして、彼らの禁欲の動機とその特徴を解明することを試みるものである。

我々はこの目的を達成するため、初期キリスト教修道制において成立した諸資料の分析から見出された以下の4点の特徴—(1)初期修道文献における空間表象が宇宙論的な立体的視座よりも地理的な平面的視座が比較的優勢であり、この傾向は悪霊論においても同様であること(2)悪霊論の空間表象的側面も、情念に潜む悪霊の識別という悪霊論の実践的側面に座を譲り、いわば後者の背景へと大きく後退していること(3)修道者たちにとって悪霊体験とは一義的に全否定されず、靈的向上の契機として積極的な意義を持ち得たこと(4)砂漠・荒野への隠遁は単なる世俗否定ではなく、悪霊との戦いを先鋭化し自己と周囲の人々の救いを旨とするものであったこと—を提示し、他者としての世界・世俗への積極的な関与を志向する点が、新プラトン主義やグノーシス主義と比較しての、初期キリスト教修道制における悪霊論・禁欲論の特異性であった、と結論する。

修道文献における空間表象

修道者であること、あるいは、修道者になることとはどのようなことなのか？彼らの表現を借用するならば「世(κόσμος)を捨てる・離れる」ことである⁽²⁾。では、ここでいう「世(κόσμος)」とは何をさすのであろうか？この問いは、修道者となるべく「世(κόσμος)」を離れる者が向かう先、即ち砂漠・荒野(ἐρημος)からこの「世(κόσμος)」を振り返ることで得られる。「世(κόσμος)」とは、砂漠・荒野(ἐρημος)と対をなす都市又は人里であり、決してプラトン主義やグノーシス主義の語彙における天・地・地下の三次元的広がりを持つ物質的宇宙全体を意味するのではない。このことは、修道文献において砂漠・荒野(ἐρημος)に対応する「世(κόσμος)」の同義語として「エジプト」(Αἴγυπτος)・「居住領域」(οἰκουμένη)・「人々の間」(τὸ μεσόν τῶν ἀνθρώπων)などの語・語句が用いられていること⁽³⁾、さらにコプト語で修道院(又は修道者の共同体・居住地)を示す語 **TOOY** が元来「山」—エジプトにおいて山とは砂漠にある岩山以外にはありえない—を意味することからも明白である⁽⁴⁾。

空間表象と悪霊表象

「世」から水平方向のかなたに展開する砂漠・荒野へと隠遁し修行する修道者たちは、性欲・食欲・会話への欲求など様々な生理的・心理的欲求を極限まで制限する禁欲行から生じる葛藤、そして世俗の生活への退転への惑いを、妬み深い悪霊の誘いであると見ていた⁽⁵⁾。『師父の金言アルファベット順集成』は、ナイル西岸の砂漠にあった修道集落スケーティスの師父モウセスが、悪霊の誘惑によって自己の修屋を放棄しようとしたが、悪霊と対峙し修道者たちと共に戦う天使のヴィジョンを師父イシドロスによって見せられ再び修道の決意を新たにした、という趣旨の逸話を伝えている。

ある日、師父モウセスは甚だしく邪欲に悩まされ、もはや修屋にすることができずに、師父イシドロスに話した。長老は彼に修屋に戻るように勧めたが、彼はこれに同意せずに言った。『師父よ、私にはできません。』そこで、師父イシドロスは彼を露台の上に登らせ、『西の方を見よ』と言った。彼が見つめると、大騒ぎをしている無数の悪霊の群が見えた。次に師父イシドロスは『東の方を見よ』と言った。彼が見つめると、栄光をたたえる無数の天使の大群が見えた。師父イシドロスは言った。『この天使たちは聖人たちを助けるために主から使わされたものだが、西の方のものは聖人たちと戦うものだ。だから、我々と一緒にいるものの数の方が多い。』そこで、師父モウセスは神に感謝し、勇気を取り戻して、自分の修屋に戻って行った。 『師父の金言アルファベット順集成』モウセス1⁽⁶⁾

空中に跳梁しキリスト者を誘惑する悪霊という像は、『エフェソ書』2.2におけるそれを継承したものを見てよい。しかし我々は、修道者と共に戦い神を賛美する天使と修道者たちを誘惑する悪霊たちが、神・命を象徴する東の空と死を象徴する西の空とに相対して布陣するイメージに注目したい⁽⁷⁾。ここでも修道者たちの視野は、空中・地上という立体的な広がりよりもむしろ、東西という水平方向へ平面的的に展開されている。更にこの逸話の主人公たちの住むナイル西岸の修道集落スケーティスから見て、東とはナイル河沿岸であり、西とは広大なリビア砂漠に他ならない。悪霊との闘争への決意を新たにする修道士の眼差しは、砂漠のかなたへと注がれる。修道者にとっての「砂漠」はまさに悪霊の領域であり、彼らの砂漠への侵入は世界規模の悪霊祓いを目指すものであった、とは多くの研究者が述べるところである⁽⁸⁾。確かに、修道者が砂漠や荒野で悪霊と遭遇しこれと闘うという逸話は多い。大筋において筆者もこのような見解を支持するものだが、修道者たちが砂漠を一義的に悪霊の領域としていたと見る事は、彼らの悪霊論を極端に単純化する恐れがある。

わが兄弟たちよ、諸君も知ってのとおり、[アダムの] 墮落以来、魂が人間達とその全ての逸楽から離脱しなければ、しかるべく神を知る事はできないのである。というのも、まず魂は己に敵対する攻撃にあい、もし次々に出来る戦いに魂が勝利するなら、魂には神の霊が住まうようになり、全ての苦痛は歓喜と喜悅へと変じるのである。これらの戦いにおいて、魂には悲嘆やアケーディアやその他種々の厄介ごとがのしかかるが、魂は [決して] 狼狽しない。なぜなら、それらは寂靜にある者を支配し得ないからである。

このためにこそ、吾等の聖なる父たちも、ティシュベ人エリアや洗礼者ヨアンネスや他の父たち同様に、砂漠へと退去したのである。だから、彼らが徳において進歩したのは、

彼らが人々の間にいた時であったと信じてはならず、彼らは大いなる寂靜のうちにある事で神の力が彼らに住まうようにと願いはじめたのであって、神が彼らを、人々を建徳せしめその弱さを癒すために、人々の間に遣わしたのは、その後のことであり、彼らが諸徳を勝ち得た時なのである。と言うのは、彼らは魂の医師であり、彼らは人々の弱さを癒す事ができたのである。この目的のために、彼らは寂靜から引きぬかれて人々のもとへ遣わされたのであるが、神は彼らの全ての弱さが癒される前には彼らを遣わさないのである。実際、人々を建徳せしめるために神が病める魂を遣わす事はありません、[靈的に]完成する以前に[寂靜から]抜け出す者達は、これを神の意志に従ってではなく、彼らの我意に従って行うのである。神はこれらの人々について言い給う。「私は彼らを遣わしていないのに、彼らは走り回る」と。このために、彼らは己を監視することも他の魂を建徳せしめる事もできないのである。

『アンモナス書簡集』I.1-2⁽⁹⁾

砂漠で修行する修道者は、悪霊からの攻撃や誘惑を体験するが、彼らがそれらに屈しないのは、「寂靜」という恩寵・祝福が与えられているからである。そしてその恩寵・祝福が与えられるのは、將に砂漠の只中なのであり、このために修道の開祖たちは預言者たち同様に砂漠へと隱遁した、即ち砂漠は悪霊の跳梁する場であると同時に恩寵の場所でもあるのだ、とアンモナスは主張する。恩寵と安息の場として砂漠を理解する者は、アンモナスだけに留まらない。著名な師父リュコポリスのヨアンネスも同様な考えをもっていた事をパラディオスは報告している。パラディオスとの面談指導を中断して、面談を求めて突如来訪した地方長官の願いに応じたヨアンネスにパラディオスは立腹したが、ヨアンネスは次のように返答したという。

なぜ立腹したのか、私に過失があったとでも言うのか？なぜ君は、私にも君にもふさわしくない事を考えたのか。聖書にこう書かれているのを知らないのか？「健康な者は医師が必要としない。病気の者にこそ医師が必要なのだ。」私が望む時に私は君を見出す。そして君も私を見出す。私が君に慰めを与えなくても、君には他の師父がいる。長官殿は世間の事で悪魔に引き回されているが、逃亡した下僕のようにつかの間の休息を楽しんだに過ぎない。彼は助けられるためにここへ来たのだから、君の望みにまかせて長談義をして、彼を捨て置くのは見当違いなことだ。君は魂の救いについていつも自由だが、彼はそうではないのだから。

パラディオス『ラウソス修道者列伝』35章6-7節⁽¹⁰⁾

ヨアンネスの目には、高官が多忙を極める「世間」とは悪魔が彼を引き回す場所であり、砂漠とは、逃亡奴隷のように悪魔から逃れた俗人がつかの間の休息を楽しみ、師父によって癒される解放の場所なのである。修道文献に頻出する師父達の祈祷治療としての悪霊払いの物語において、ほとんど全ての場合、悪霊に憑かれた人々が都市から砂漠へとやって来て、砂漠の只中で修道師父達に癒されている。このような逸話群が、悪霊の領域＝砂漠対人間の領域＝「この世」という2項対立の図式を示すものではない事は明白である。砂漠とは、先程取り上げたモウセスとインドロスの逸話にあるように⁽¹¹⁾、日常では見えない誘惑と恩寵・悪霊と天使との対立がありありと実感される場所なのである。確かに砂漠には悪霊が跳梁している。しかし、砂漠とは、悪霊が住むべき生息領域などではない。在来宗教の神殿の廃墟で「我々の場所から出て行け」と恫喝する悪霊達に対して、「おまえ達に場所などありはしない！」と師父エリアスは喝破する⁽¹²⁾。砂漠

や荒野は、悪霊と修道士が対峙する場であるが、しかし、そこは決して悪霊の住まうべきところではない。悪霊は砂漠を死守し、修道士は砂漠で悪霊を追い詰める。

悪霊との戦い＝悪霊の識別

都市や村落の日常生活においては不可視な悪霊の存在が顕になる砂漠において、修道者は悪霊との戦いをどのように遂行するのであろうか。伝説的・カリスマ的修道者によって行われるアクチュアルな悪霊払い―憑依現象や難病に悩む者の祈祷治療さらには場所の悪霊祓いなどを聖人伝的資料の多くが言及するが、指導的修道者自身の著作や彼らに帰される金言の多くは、修道者自身の心に去来する想念や情念に潜み罪へと誘惑する悪霊との内面的な戦いを専ら論じ、悪霊の策謀をいかにして認識するかに教説の焦点を集中する。アントニオスにおいて、悪霊の攻撃を識別する事は、心身における自然な衝動と不自然な衝動を識別する事である。悪霊は、多かれ少なかれ、情念と同一視されている。彼らは悪しき想念として現れ、人間の魂にその座を占める。しかし、アントニオスは全ての情念を悪霊視しているのではない。多くの場合、情念とは、プラトン主義やストア派の伝統同様、身体の自然な動きへの不注意の結果である⁽¹³⁾。この事は以下に掲げる断章からも明らかとなる。

さて、身体には三つの動きがあると私は確信する。[第1の動きとは]本性的かつ固有な動きで、魂がそれに同意を与えるまでは[魂に]作用せず、静かに留まる類のものである。[第二の動きとは]飲食の過剰による身体の充満の結果としての動きである。過食の惹起する血液の熱気が、食欲によって動かされる身体を干上がらせるのである。この故に使徒は言う。「葡萄酒に酔い痴れてはならない」と。また主は福音において弟子達を戒めて言われた「心が鈍くならないようにいつも注意していなさい、放縦や深酒と諸々の快樂のために」と。特に彼らは聖性の境涯を望むので彼らは[かくの如く]言わねばならぬ「わが身体を打ち叩き、これを服従せしめる」と。第三の動きは、悪しき霊達から来るもので、我々を嫉妬へと誘い、聖性を目指す者を彼らの側に引きずり込まんとするものである。

『伝アントニオス書簡集』I.35-41. (14)

師父アントニオスは語った「私の考えによると、体にはそれにふさわしく、しかも魂が望むことなしに生じる自然の動きがある。それは専ら情念を欠いた動きを体に示すだけである。また、別の動きがある。体が飲食物に充たされ温められ、続いて血液の熱が体を動かすことからくるものである。だから、使徒は言っている『体を持ち崩すものとなる葡萄酒に酔い痴れてはならない』さらに福音のなかで主も弟子たちに命じている『あなた達の心が放蕩や深酒に鈍らないように注意せよ』また、靈的に戦う人々には悪魔の計略と嫉妬からくる別の動きもある。それゆえ、肉体に三つの動きがあることを知らなくてはならない。即ち、第一は自然的なもの。次は過度の飲食からくるもの、第三は悪魔からくるものである。」

『師父の金言 アルファベット順集成』アントニオス 22 (15)

悪霊との闘いを己の心に去来する様々な情念や想念の識別とする理解は、『師父の金言』における修道者の逸話にも数多く伝えられる。証拠となる個所を列挙しておこう。

師父ポイメンが師父イシドロスについて話したところによると、彼の悪い考えが彼に向

かって「お前は偉大な者だ」と言っていた。彼はこれに答えて言うのであった。「それでは、私は師父アントニオスのようなのだろうか。私はまったく師父パンボヤ、神によみせられた他の師父たちに似た者になったのであろうか。」このように答えることによって、彼は平安を見出した。また、敵なる悪霊たちが、最後の懲罰に投げ込まれるぞ、と言って、彼を失望させようとしたとき、「たとえ懲罰に投げ込まれても、私はお前たちを私の足の下に見る」と答えていた。 『同』 イシドロス 6 (16)

ある兄弟が師父クロニオスに尋ねた。「私の思考を捕らえ、罪に導くまで私を無感覚にする忘却に対して、どうすべきでしょうか。」長老は答えた。「異邦人がイスラエルの子らの悪行の結果として、敵が契約の櫃を奪ったときに、それを運んで彼らの神ダゴンの神殿に置いたが、そのとき、ダゴンの像は契約の櫃の前に倒れた」。兄弟は彼に尋ねた。「それはどういう意味ですか」。長老は答えた。「敵なる悪霊が特別な方法で人間の思考を捕らえようとするとき、彼を引きずって目に見えない情念に導く。そこで、思考がもとに戻り、神を求め、永遠の裁きを思い起こすならば、情念はすぐに衰え、消え去る。事実、聖書にこう書かれている。『あなたが立ち戻って悲しむとき、あなたは救われ、どこにいたかが分かるだろう』」 『同』 クロニオス 2 (17)

長老達曰く「君にやってくる全ての想念に対してこう言え『おまえは我々のものか？それとも敵のものか？』と。そうすれば想念は[自らの素性を]自白するであろう。」

『師父の金言 無名集成』 99 (18)

ある人が長老に尋ねた「修道士がすべき事は何ですか？」長老曰く「識別である」

『同』 93 (19)

さて、修道文献において悪霊が「悪しき」情念と結びつけて論じられることから、修道靈性における悪霊論は「非神話化」・「内在化」されたものであると現代の多くの研究者は主張してきた。しかし、その悪霊論が内在的と見なされやすい『アントニオス書簡集』VIも詳細に検討すれば、「人間の霊魂と悪霊は起源を同じくするが、前者が神の摂理によって原初の状態に復帰可能であるが、後者は復帰不可能である。ために、後者は前者を嫉妬する」と説いており、悪霊の外在性を主張していることは明確である。また、悪霊が天使同様に希薄な身体を有するという『アントニオス書簡集』の教説を典拠として、その悪霊論を単純に内在化されたものと見る事を留保する様 Rubenson は注意を喚起している⁽²⁰⁾。『師父の金言アルファベット順集成』ポイメン 67 を取り上げ、悪霊論における「非神話化」「内面化」の側面を Brown は強調している⁽²¹⁾。果たしてこの逸話をそのように解釈する事は妥当であろうか。問題の逸話の全文は以下の通りである。

師父アガトンの弟子である師父アブラハムは師父ポイメンに尋ねた。「どうして悪霊どもは私を攻撃するのでしょうか。」師父ポイメンは語った。「悪霊どもがあなたを攻撃すると言うのか。我々が自分の意思を行うのであるから、彼らが我々を攻撃するのではない。我々の意思が悪霊になるのである。意思を実現するために我々を攻めるのは、我々の意思なのである。しかし、悪霊どもがどんな者を攻撃するかを知りたいか。それはモウセスや彼と同じような者を攻撃する。」 『師父の金言アルファベット順集成』ポイメン 67 (22)

この逸話は、自己の内面の葛藤（恐らく性的な誘惑）を悪霊からの攻撃と見てこれを告白する修道士に、悪霊に攻撃されるのは靈的に卓越した者だけであって、靈的に未熟な者の誘惑体験は彼の我意に起因すると指導したとの趣旨のものである。この逸話においても悪霊の外在性を軽く見る事は当を得た事ではあるまい。我々の目から見れば、修道者が闘争を挑むのは彼ら自身の欲望や情念なのだが、彼ら自身にとって、闘争の対象は欲望や情念を突破口として攻め寄せてくる悪霊そのものに他ならない。以下に掲げる断章は、情念と悪霊との間に密接な関連を見ていた砂漠の修道師父たちが、悪霊と情念を明らかに区別していた事を明示している。

師父アントニオスの弟子である師父ピテュリオンは語った。「悪霊を追い払おうと望む者は、だれでもまず、自分の情念を服従させねばならない。事実、人はどんな情念でも支配する者になったら、悪霊はこの情念から追い払われる。たとえば怒りに結びついた悪霊がいる。あなたが怒りに勝てば、怒りの悪霊は追い払われる。これはどんな情念についても同じである。」
『同』ピテュリオン 1 (23)

彼 [=師父マトエス] は語った。「サタンは、魂がいかなる情念によって征服されるかを知らない。彼はみだらな考えであれ、中傷の念であれ、その他の情念であれ、種をまくことはまくが、収穫できるかどうかは分かっていない。しかし、情念が魂に栄養を与えさえすれば、魂が傾く事は知っている。」
『同』マトエス 4 (24)

積極的な悪霊理解

情念を刺激しあるいは情念を突破口として誘惑する悪霊は、修道者にとって危険極まりないのである。しかし、危険極まりなく時として致命的なものとする悪霊の誘惑を体験することを、修道者たちは単純に回避しようとはしない。むしろ彼らは敢えて悪霊の攻撃にわが身を曝そうとするのである。師父アントニオスの弟子「単純者」パウロスは、修練期間を優秀に修了した後、師父の住まいから離れた砂漠の只中に立てられた修屋に導かれて、次の様に言い渡された、とパラディオスは報告する。「見よ、おまえは修道士になったのだ。悪霊たちに試みられる為に、ここに一人でとどまれ。」⁽²⁵⁾ もし悪霊による「誘惑」が単純に否定的な価値を持つのであれば、アントニオスや弟子「単純者」パウロスは、砂漠の只中からこそ退去しなければならない。しかしアントニオスは靈的基礎訓練が終了した弟子に、悪霊の誘惑に直面する事を命じるのである。アントニオスの弟子アンモナスの名を冠する書簡の著者も、悪霊の誘惑を体験し克服することが、修道者の靈的向上に不可欠であるとの見方を示している。

諸君が心の苦しみにある事を、私は知っている。というのも、諸君は誘惑に陥っているからである。とはいえ、雄雄しくそれを忍耐するならば、歓喜を引き出すであろう。実際、もし誘惑—可視的・非可視的をとわず—が諸君に課せられなければ、すでに諸君が到達した以上には、進歩しないであろう。実際、全ての聖徒達も、彼らの信仰が増大することを願ったとき、誘惑に陥ったのである。と言うのも、誰かが神から祝福を受けるなら、神が彼に賜った祝福を奪う事を望む敵どもから、即座に誘惑が投げかけられるのである。実際ダイヤモンドもは、祝福された魂が進歩するのを知って、或いはひそかにあるいは公然とこれに敵対するのである。
『アンモナス書簡集』 IV.1 (26)

誘惑は神からの祝福に続いて、それを魂から剥奪しようとする悪霊たちからやってくる。換言すれば、誘惑はそれを体験する修道者の高い靈性を示す指標とも言える。これと同様の教説は、『師父の金言アルファベット順集成』ポイメン67においても見出される事は先ほど確認した通りである。

吾が愛する者たちよ、主の祝福が諸君に訪れるなら、誘惑がそれに続くのである。故にそれらを克服するまで忍耐せよ。というのも、それらを克服するならば、大いなる進歩と諸君の諸徳の増大が生じ、さらにそれは諸君が知らないような天的な大歓喜を与えるであろう。 『アンモナス書簡集』IV.2 (27)

それらの克服を契機として修道者は靈的向上を実現する。

魂がハデスから上昇する時、魂はずっと神の靈と共にあり、すべての時において誘惑にあうのである。魂が誘惑を克服すると、洞察力にみち[新たに]別な美しさを得るのである。エリアが挙げられた時、第一の天に至るや彼はその輝きに圧倒された。第二の天に至るや驚きのあまりこう叫んだほどである。「第一の天の光栄すら闇のように思える」と。そして各々の天についても同様[に叫んだほどである]。故に義人達の魂もまた諸天の天へと上昇するまで、前進し進歩するのである。 『同』IV.6 (28)

情念—悪霊による誘惑の契機・あるいは誘惑体験そのもの—の止滅を喜んで師父から批判された修道士の逸話は示唆的である。

師父ポイメンが師父ヨアンネス・コロボスについて話していたところによると、彼は神に願い、自分の情念が除かれると、もはや、心配はしなかった。そうして、ある長老の所にいって言った。「私は気が静まり、何の闘いもありません。」すると長老は語った。「行って、あなたがまえに持っていた悩みと謙虚と同様に、闘いがふたたび戻ってくるよう神に願いなさい。魂が進歩するのは闘いによるからです。」そこで、彼は神に願い、闘いがやってくると、もはやそれが除かれることを祈らず、こう言った。「主よ、闘いに際して忍耐をお与えください。」 『師父の金言 アルファベット順集成』ヨアンネス・コロボス 13 (29)

修道者自身の救霊は「試み」の克服によって成就されるのであり、それは終生にわたる絶え間ない戦いの過程である。このような教えは枚挙に暇がない。

彼 [= 師父アントニオス] は語った。「試みられない者は、だれも天の国に入れない。」事実彼はこうも語っていた。「試みを取り除いてみよ。だれも救われる事はない。」

『同』アントニオス 5 (30)

…実際、アントニオスは我々に、試みられない者はだれも神の国に入れない、とっている。また使徒ペトロは、「諸君は喜んで、今しばらくの間、様々な誘惑に苦しまねばならぬが、諸君の信仰は、その誘惑によって本物と証明され、火で精錬されながらも朽ちるほかない金よりも尊い」と。風に揺り動かされる木々は、[より一層深く]根をはり[善き実をむすぶように]交雑するといわれている。同様な事は義人にもおこるのである。

『アンモナス書簡集』IV.3 (31)

師父アントニオスは師父ポイメンに語った。「人間の偉大な業とは、神のみ前に自分の過ちを認め、最後の息を引き取るまで試みを覚悟する事だ。」

『師父の金言 アルファベット順集成』アントニオス 4 (32)

我々は、修道士の修行の重要な側面として、悪霊との戦い—悪霊が惹起する「誘惑」・「試み」の克服—である事を以上の断章で確認した。悪霊は修道士にとって靈的向上の契機となるばかりではない。靈的洞察という知的側面に積極的なかわりをも持ち得る

共住修道院においてヘシカストであった兄弟でしばしば立腹する人がいた。かれは「独居生活に移ろう。そうすれば他人と関わることも無く、私の情念は止むであろう。」かれは[共住修道院から]出て、洞窟で独居生活を始めた。しかし、ある日の事である。水瓶を充たして地面に置いたところ、それが突然倒れてしまった。彼は水瓶を立てて再び充たしたが、また倒れてしまった。三度水瓶を立てて充たしたが、またもや倒れてしまった。彼は激怒して水瓶を叩き割ってしまった。我に帰り悪霊に惑わされていたのだと気づいた時、彼は言った。「独居生活に入ったにもかかわらず[怒りの情念に]まだ圧倒されている。共住修道院へ戻るとしよう。戦いはどこにでもある。忍耐と神の助力が必要だ。」こうして彼は洞窟を後にし共住修道院に帰還したのである。『師父の金言 無名集成』201 (33)

修道の課題である自己の情念の制御や戦いは、環境の変更によって解決されず、自己の忍耐と神へ祈りに徹する事で解決する。これがこの逸話の結論であり、主人公の得た教訓でもある。極めて小さな事であるが、件の修道士が教訓を得たのは彼が「我に帰り悪霊に惑わされていたのだと気づいた」刹那であったと指摘されている点に我々は着目する。靈的向上の端緒となる教訓の獲得に悪霊が貢献する、という逆説的かつ積極的な悪霊理解すら展開され得るのである。

世界への旺盛な関心

「この世」(κόσμος) から離脱・退去し、砂漠・荒野のかなたで、自己の靈的向上をひたすら目指して悪霊との靈的闘争としての禁欲修業に励む修道者たちの姿は、一見すると、世界否定や人間嫌いあるいは宗教的利己主義の態度表明であるかの様に思われる。夜道に迷い助けを求める小童に対して、修屋での閉居修行を貫徹すべく応対を拒否する修道士ナタナエルの逸話や⁽³⁴⁾、「わずらわしさ」を理由に主教就任の誘いを退けるようにパラディオスに推奨するリュコポリスのヨアンネスの発言⁽³⁵⁾、主教職就任を受諾するように懇願する近隣住民を前に耳を削ぎ落してまで願いを退ける修道士たちの態度⁽³⁶⁾、修道士が都市や集落へ出張することは魚が水中から出ると同様に危険だとのアントニオスの発言⁽³⁷⁾などを不用意に読むならば、このような錯覚の根拠となりうるとすら思われる。

しかし、裕福で高貴な出自にもかかわらず、一切を放棄して砂漠へと隠遁し清貧と禁欲を極め、世界に対して「ずっと以前に死んでいる」⁽³⁸⁾理想の修道者として叙述される師父アルセニオスが、蛮族によるスケーティス襲撃とローマ陥落とを同じ深刻さをもって悲嘆したと伝える逸話や⁽³⁹⁾、理想的な修道者とはどのような者かと問われて、著名な修道師父マカリオスが、自分はいまだ修道者になってはいないが、かつて砂漠のかなたで真実の修道者を見たとの告白したと伝える逸話は、我々にこのような拙速な判断を許さないであろう。

私は…砂漠に退いた。私はそこに湖と、その中央に島を見つけた。そこには砂漠の獣たちが水を飲みに来ていたのである。すると、その真中に二人の裸の人間を見つけた。私の体は震えた。霊であると思ったからである。彼らは私が震えているのを見て言った。「恐れないで。我々も人間です。」そこで、私は彼らに尋ねた。「あなたたちはどこから来たのです。どうして砂漠に来たのですか。」彼らは答えた「我々は共住修道院の者で、皆の同意を得、ここに来て四十年になります。一人はエジプト人、一人はリビア人です。」そして、彼らも私に尋ねた「世間はどうですか。雨は適当な時によく降りますか。世間は繁栄していますか。」私は「はい。」と答え、私の方も彼らに尋ねた。「どうしたら修道者になれるでしょうか。」彼らは言った。「人は世のすべてのものを捨てなければ、修道者にはなれない。」…

『師父の金言 アルファベット順集成』マカリオス2⁽⁴⁰⁾

マカリオスにとって、この荒野の奥深くに住まう裸形の修道士こそが「世のすべてのものを捨てた」真の修道士である。しかし、彼は同時にこの修道士たちが俗世間の人々の幸せ—霊的なそれではなく生活者のそれ—に大きな関心を示した事を報告する。「世のすべてを捨てる」ことと世界への関心を保つことは、矛盾無く、否それ以上に、修道の核心において相並び立つことを示唆する。実際、都市において主教として宣教・司牧することを「わずらわしい」とするヨアンネス自身、砂漠における自己の隠遁所に100人以上の来訪者を収容可能な面会室を併設し、定期的に来訪者の求めに応じて様々な面接指導・相談・祈祷治療を行い⁽⁴¹⁾、持ち前の予知能力によって皇帝テオドシオスの度々の勝利をも預言して国政にも大いなる関心を示した⁽⁴²⁾。また、アントニオスも、エジプトの砂漠地帯に点在する修道者の共同体を準定期的に巡回して修道者の育成指導のみならず一般人からの相談をも受けつけ請いに応じて祈祷治療をも行っていた⁽⁴³⁾。さらに、彼はアリウス派問題にも、アタナシオス側に立って積極的に介入し、アレクサンドリアへの出張⁽⁴⁴⁾やアリウスを弾劾する書簡を発している⁽⁴⁵⁾。さらにプラトン主義的な脱世界的志向が濃厚なポンツのエウアグリオスすらも、修道者とは、あらゆる人から離脱していると同時にあらゆる人と連帯し⁽⁴⁶⁾、すべての人の救いと霊的向上を我がことのように喜ぶべきである⁽⁴⁷⁾、と主張している。これらの事実から、キリスト教初期修道制における修道者たちが世俗の人々に対する旺盛な関心と配慮とを保っていたことは明白である。

世界を悪霊から救う禁欲

さて、彼らの悪霊論と世俗の人々への関心と配慮とはどのような関係があったのであろうか。ここで、我々は再び悪霊の外在性の問題を振り返るべきである。確かに、指導的な修道者が自己の弟子たちに宛てた作品や彼らに帰される語録の多くにおいては、修道者の情念に潜む悪霊の識別・対処という修徳的関心に即して悪霊の問題が論じられ、アクチュアルな悪霊祓いには言及されていないことは、先ほど確認したとおりである。しかし、このことは、修道者たちが悪霊を災因・病因として外在的にとらえていなかったことを意味しない、むしろ訪問者の懇請に応じて治療行為としての悪霊祓いを行うこと自体、修道者たちが病因・災因として悪霊を捉えるという外在的悪霊観を訪問者たちと共有していたことを示している。

では、霊的指導と治療行為それぞれの場面における悪霊観は、修道者の思考において、断片的に脈絡なく存在していたのであろうか？この問いに対して我々は、二つの場面における悪霊観は、

修道者の思考における統一的な悪霊論の現れであると主張したい。

重篤な狂犬病に苦しみ錯乱状態の子供を担ぎ込まれ癒しを懇願されたニトリアのアムーンは、その子の病の原因とは家族が家畜を隣人から盗んだ罪にあることを指摘し、その償いを条件に癒しを行い⁽⁴⁸⁾、未婚の娘との密通の罪を修道者に転嫁した男は、悪霊の激しい責苦に堪えかねて修道者の潔白を告白せざるをえなくなる⁽⁴⁹⁾。悪霊とはある人物のうちに潜む密かな罪や悪しき傾向を、様々な現象形態、特に疾病や障害によって可視的ないし可聴的に顕在化させる存在なのである。

罪の顕在化に他ならない疾患や障害の癒しは、必然的に罪の赦しをも含意する。素行不良な司祭から頭部の重篤な潰瘍の癒しを哀願されたアレクサンドリアのマカリオスは、司祭職からの引退を条件として癒しを行い⁽⁵⁰⁾、丹毒を患う悪霊憑きの児童についても、回復後 40 日間肉類と葡萄酒の摂取の禁止を条件に癒しを行っている⁽⁵¹⁾。これらの癒しの条件ないしは術後処置ともいふべき指示は、重大な罪を犯したキリスト教徒に対して、古代の教会が伝統的に課してきた贖罪行為と同様の措置である⁽⁵²⁾。修道者の意識において、訪問者の願いに応じて行う祈祷治療としての悪霊祓いは、単なる心身の癒しにとどまらず、罪の赦しでもあったのである。大貫隆の表現を借りれば、初期キリスト教修道制における修道者たちが、悪霊との霊的闘争として行じた禁欲修業は⁽⁵³⁾、まさに「世界を神と和解させ」「世界を救う」ものであったのである⁽⁵⁴⁾。

結び

我々は、キリスト教初期修道制の修道者たちにおける禁欲の意義を悪霊論とのかかわりで概観し、いくつかの特徴的な側面を取り出してきた。まず、空間において悪霊を捉える側面において、修道者が離脱するコスモスとは三次元の広がりを持つ「宇宙」ではなく、彼らが隠棲する砂漠と水平方向に連なる都市・村落という日常生活の場であった。そして彼らが隠棲する砂漠・荒野とは、日常生活では見えない悪霊の跳梁が明瞭に看取される領域であった。しかし砂漠・荒野とは、悪霊たちに割り当てられた棲息領域—ヘルメス文書やポルピュリオスの悪霊論における月下の領域のような—などでは決してない。砂漠・荒野とは、修道者が自己の霊的向上を勝ち取る戦いと祝福の場所なのである。霊的向上を求め砂漠・荒野へと隠遁する修道者にとって、悪霊からの攻撃や誘惑は単純に否定され回避されるべきものではなかった。基礎訓練を修了した弟子を悪霊との遭遇へと送り出すアントニオスや悪霊の誘惑の止滅を喜びたしなめられた修道士の逸話・アンモナス書簡の教えなどからは、悪霊の攻撃からの脱出や悪霊を屈服させることよりも、悪霊との闘争そのものに意義を見出す姿勢が伺われる。さらには、悪霊による惑乱を契機に自己の欠点を反省しより深い霊的洞察に至った修道士の逸話には、霊的向上の端緒となるような教訓を得るのに悪霊が貢献するという逆説的かつ積極的な悪霊理解すら見出される。悪霊とは忌避されるべきではなく、その蠢動と誘惑を的確に識別し忍耐することで克服されるべき存在であった。それゆえに悪霊たちとの遭遇・闘争は、修道者たちにとって積極的に求められるべきものであり、悪霊と天使の働きが顕わになると思われた砂漠・荒野へと彼らは隠遁した。このような修道者の態度は、悪霊とその支配領域である月下界からの離脱の実現のために禁欲的生を選択する新プラトン主義者ポルピュリオスのそれと、大きく相違する⁽⁵⁵⁾。一見すると、宗教的利己主義や単なる世界否定の態度表明であるかに見える砂漠・荒野での隠棲への彼らのこだわりも、世俗の人々の生

活者としての幸・不幸を訪問者に尋ね、ローマの滅亡を修道者集落の荒廃と同じ真剣さで嘆く点で、世俗の人々への関心・配慮と対立するものでないことが分かる。世俗の人々への関心・配慮は、彼らの願いに応じてなされる悪霊からの解放・罪の赦しとしての癒しにおいて、より一層明確になる。自己の想念の影に潜む悪霊だけでなく、人々の病と罪に潜む悪霊とも修道者は対峙する。修道者の禁欲を通じての悪霊との戦いは、世界とそこにある人々に救いと罪の赦しを与えようとするものであった。

以上をふまえ、「少数の知的・霊的エリートが、コスモスの特定領域に結び付けられた悪霊からの離脱を目標として行い、悪霊との霊的闘争や他者を悪霊から解放するという利他的視点を持たない」新プラトン主義的な禁欲や「悪霊の被造物であり悪霊的なコスモスを内部から解体・解消する事を目指す独我論的」グノーシス主義の禁欲に対して、キリスト教初期修道制における禁欲霊性が、悪霊との闘争や悪霊の存在にすら積極的意義を与え、また他者としての世界への旺盛な関心を有する点で古代末期の宗教思潮から一步外へと踏み出すものであった、と結論する。

主要参考文献表

テキスト類

- 【Ammonas (アンモナス)】
Epistulae (『書簡集』)
ギリシャ語校訂テキスト並びに仏訳
Nau, F. (ed. & trans) *Ammonas : Successeur de Saint Antoine Textes Grecs et Syriaques*. Paris 1914 (rep.ed.Turnhout, Belgique Brepols 1994)
- 【Apophthegmata Patorum(『師父の金言』)】
アルファベット順集成テキスト
Migne, *Patorologia Graeca tom. 65. coll.71-440*
無名集成テキスト
Nau, F. (ed. & trans.) *Histoire des Solitaires Égyptiens* (Revue d'orient Chrétien. Vol12 [1907] 48-68, 171-181, 393-404; vol13 [1908] 47-57, 266-283; vol14 [1909]357-379; vol17 [1912] 204-211, 294-301; vol.18 [1913] 137-146)
ギリシャ語アルファベット順集成テキストの日本語訳
古谷功訳「砂漠の師父の言葉」あかし書房 1986
ギリシャ語無名集成テキストの英語抄訳
Stewart, C. (ed. & trans.) *The World of the Desert Fathers*. Calamazoo, Michigan. Cisterian Publ. 1986
- 【Evagrius Ponticus (エウアグリオス, ポントスの)】
De Oratione (『祈りについて』) ギリシャ語テキスト
Migne. *Patrologia Graeca*. Tom. 79 coll. 1165-1120
- 【Historia Monachorum in Aegypto (『エジプト修道者列伝』)】
ギリシャ語校訂テキスト並びに仏訳
Festugière, A. -J. (ed. & trans.)
Historia monachorum in Aegypto : édition critique du texte grec et traduction annotée
Bruxelles : Societe des Bollandistes, 1971 (Subsidia Hagiographica ; no 53)
英訳
Russell, N. (trans.) Ward, B. (intro.) *The Lives of Desert Fathers*. Calamazoo, Michigan. Cisterian Publ. 1981
- 【Palladius Monachus (パラディオス)】
Historia Lausiaca (『ラウソス修道者列伝』)
ギリシャ語テキスト
Robinson, J. A. (ed.) *The Lausiaca history of Palladius. I. Prolegomena. II. Introduction and text*. Cambridge, 1891-1952 (rep. Ed. Nendeln. Kraus Reprint , 1967)
英訳
Robert, T. (trans. & annotation) *The Lausiaca history / Palladius* ; Meyer New York : Newman Press, 1964

二次文献

- Bouyer, L. [1960-1965] *Histoire de la spiritualite chretienne, t. 1-3*
(第1巻第2部・第2巻補遺・第3巻第1部の抄訳)
大森正樹 他 訳 [1996]「キリスト教神秘思想史 I 教父と東方の靈性」平凡社
- Brown, P. [1988] *The Body & Society:Men, Women, and Sexual Renunciation in Early Christianity*. Columbia Univ. Press N.Y.
- Carner, D. [1997]“The Practice and Prohibition of self-castiration in Early Christianity.” (*Vigiliae Christianae* vol.51(4) pp.369-415)

- Crum, W. E. [1939] *Coptic Dictionary*. Oxford Univ. Press.
 Heussi, K. [1936] *Der Ursprung des Mönchtums*. Tübingen
 Rubenson, S: [1995] *The letters of St. Antony : monasticism and the making of a saint*.
 Minneapolis Fortress Press
 Regnault, L [1991] *Ammonas, Saint (The Coptic encyclopedia*. Aziz S. Atiya, editor-in-chief
 New York ; Oxford Maxwell Macmilan International. 1991. p113:)
 Wimbush, V. L [1986] *Renunciation Towards Social Engineering—An Apologia for the Study of
 Ascetism in Greco—Roman Antiquity— in Occasional papers of the Institute for
 Antiquity & Christianity 8*
 大貫 隆 [2000] 『グノーシス考』岩波書店
 戸田 聡 [1995] 「無学な修道者アントニオス？初期修道制研究の一動向」(『オリエント』38,2,
 pp.162-174)
 ——— [1998] 『師父たちの金言』とポントスのエウアグリオス」(『オリエント』41,2. pp.213-228)
 久松英二 [1994] 「東方修道制におけるアパテイア」(『南山神学』vol.17 pp1-21.)

註

- (1) 本稿は平成13年に筆者が東京大学大学院人文社会系研究科へ提出した修士学位申請論文『古代末期禁欲論研究』から第2章を抜粋し大幅に改稿したものである。
- (2) 『エジプト修道者列伝』1章24節・26節, 8章3節『ラウソス修道者列伝』54章3節『師父の金言アルファベット順集成』アントニオス20・宦官ヨアンネス3 『師父の金言無名集成』9・88
- (3) 「世」(κόσμος) : 『師父の金言アルファベット順集成』マカリオス21・『師父の金言無名集成』82・88 『エジプト修道者列伝』序文9節「エジプト」(Αἴγυπτος) : 『師父の金言アルファベット順集成』アキラス3 『師父の金言無名集成』187 「居住領域」(οἰκουμένη) : パラディオス『ラウソス修道者列伝』1.54 『エジプト修道者列伝』1章46節「人々の間」(τὸ μεσὸν τῶν ἀνθρώπων) : 『アンモナス書簡集』I.2
- (4) Crum, W.E [1939] pp.440-441.
- (5) 『伝アントニオス書簡集』第6書簡19-20節 : 人間には救い (= 墮落以前の聖なる状態への回帰) の可能性が開かれている一方、自己にはそれが閉ざされ永久に断罪されている事を知る故に人間を妬む悪霊。アタナシオス『アントニオス伝』5章1節 : 「善を憎むのが常である嫉妬深い悪魔」妬みの対象は明らかではないが、アントニオスの修道の志に対して悪魔が不快感を抱いていることは確か。「妬み」を悪霊の属性とするのは、キリスト教文献ではなじみ深いものである。『知恵の書』II.23-24 : 悪魔の妬みの対象自体は明らかではない。悪魔と妬みを結びつけるの旧約ではこの一箇所のみ。『アダムとエバの生涯』12-16 : 悪魔が人間に抱く妬みの原因は、自己以下の存在である人間が楽園において享受する天賦的幸福。オリゲネス『ヨハネによる福音注解』XXXII.2.22 : 『知恵の書』II.23-24.の引用と釈義。妬みの対象は明らかではない。エイレナイオス『使徒たちの使信の説明』16 : 神の格別な配慮を享受する人間に対して妬む天使が悪霊化する。ニュッサのグレゴリオス『教理大講話』VI.5.10 : 人間が持つ神の似姿性への妬み
- (6) 古谷功訳 pp.269-270.
- (7) 命の象徴としての東 ; オリゲネス『祈りについて』32章 : 祈禱にあたって東面することの推奨。ニュッサのグレゴリオス『マクリネ伝』23章 : 臨終の祈禱のために瀕死の聖女マクリネの病床が東向きに直される。エルサレムのキュリロス『洗礼志願者のための秘儀講話』第1講話9 : 洗礼志願者は悪魔・悪霊を呪詛し絶縁の後、楽園を象徴する東へと向きを変える。死の象徴としての西 ; エルサレムのキュリロス『洗礼志願者のための秘儀講話』第1講話2,4-8 : 洗礼志願者は西に向かって悪魔・悪霊を呪詛し絶縁する旨を宣言する。

- (8) Heussi, K. [1936] p. 111. 及び Bouyer [1960–1965] 邦訳 p. 233. を参照。大貫 [2000] p. 61. もこの見解を踏襲する。
- (9) οἴδατε καὶ ὑμεῖς, ἀγαπητοὶ ἀδελφοί μου, ὅτι ἀφ’ οὗ ἐγένετο ἡ παράβασις, οὐ δύναται ἡ ψυχὴ, ὡς δεῖ, τὸν Θεὸν ἐπιγνῶναι, ἐὰν μὴ συστείλῃ ἑαυτὴν ἀπὸ τῶν ἀνθρώπων καὶ ἀπὸ παντὸς περισπασμοῦ. Τότε γὰρ ὄψεται τὸν πόλεμον τῶν μαχομένων αὐτῆ, καὶ, ἐὰν νικήσῃ τὸν κατὰ καιρὸν ἐρχόμενον πόλεμον, τότε ἐνοικεῖ ἐν αὐτῇ τὸ πνεῦμα τοῦ Θεοῦ, καὶ πᾶς ὁ κάματος μεταβληθήσεται εἰς χαρὰν καὶ ἀγαλλίασιν. Ἐν δὲ τοῖς πολέμοις ἐπιφέρονται ἐπ’ αὐτῆ λῦπαι, καὶ ἀκηδῖαι, καὶ ἄλλα πολλὰ πολύτροπα βάρη, ἀλλὰ μὴ πτοηθῆ· οὐ γὰρ ἰσχύσουσι κατ’ αὐτῆς ἐν ἡσυχίᾳ πορευομένης. Διὰ τοῦτο καὶ οἱ ἅγιοι πατέρες ἡμῶν ἐν ταῖς ἐρήμοις ἦσαν συνεσταλμένοι, ὅ τε Ἡλίας ὁ Θεσβίτης, καὶ Ἰωάννης ὁ Βαπτιστής, καὶ οἱ λοιποὶ πατέρες. Μὴ γὰρ νομίσητε, ὅτι ἐν μέσῳ τῶν ἀνθρώπων ὄντες οἱ δίκαιοι, μεταξὺ αὐτῶν κατώρθωσαν τὴν δικαιοσύνην· ἀλλὰ πολλὴν ἡσυχίαν πρότερον ἀσκήσαντες, ἐσχήκασιν ἐν ἑαυτοῖς οἰκοῦσαν τὴν δύναμιν τὴν θεϊκὴν, καὶ τότε ὁ Θεὸς ἀπέστειλεν αὐτοὺς εἰς τὸ μέσον τῶν ἀνθρώπων, ἔχοντας τὰς ἀρετὰς, ἵνα οἰκοδομῆ γένωνται τῶν ἀνθρώπων καὶ θεραπεύσωσι τὰς ἀρρώστιας αὐτῶν· ἰατροὶ γὰρ ἦσαν τῆς ψυχῆς καὶ τὰς ἀρρώστιας αὐτῶν ἠδύνατο θεραπεῦσαι. Διὰ ταύτην τὴν χρεῖαν, ἀπο τῆς ἡσυχίας ἀπεσπῶντο, καὶ πρὸς τοὺς ἀνθρώπους ἀπεστέλλοντο· τότε δὲ αὐτοὺς ἀποστέλλει ὅταν θεραπευθῇ πάντα αὐτῶν τὰ νοσήματα. Ἀδύνατον γὰρ ἐστὶ τὸν Θεὸν ἀποστέλλαι ψυχὴν εἰς μέσον τῶν ἀνθρώπων, πρὸς οἰκοδομὴν αὐτῶν, ἔχουσαν τὴν ἀσθένειαν· οἱ ἐρχόμενοι δὲ πρὸ τοῦ τελειωθῆναι, τῷ ἰδίῳ θελήματι ἐρξονται, καὶ οὐ τῷ τοῦ Θεοῦ. Ὁ Θεὸς γὰρ λέγει περὶ τῶν τοιούτων· « Ἐγὼ μὲν οὐκ ἀπέστειλλον αὐτοὺς, αὐτοὶ δὲ ἀφ’ ἑαυτῶν ἔτρεχον », διὰ τοῦτο οὐδὲ ἑαυτοὺς φυλάττει δύναται, οὐδὲ ἄλλην οἰκοδομησαὶ ψυχὴν.
- (10) Διὰ τί ἐβλάβης κατ’ ἐμοῦ; τί ἄξιον βλάβης εὔρες, ὅτι ἐκεῖνα ἐλογίσω ἄπερ οὔτε ἐμοὶ πρόσσεστιν οὔτε σοὶ ἐπρεπεν; ἢ οὐκ οἶδας ὅτι γέγραπται· Οὐ χρεῖαν ἔχουσιν οἱ ὑγιαίνοντες ἰατροῦ· ἀλλ’ οἱ κακῶς ἔχοντες; σὲ ὅτε θέλω εὐρίσκω, καὶ σὺ ἐμέ. καὶ ἐὰν μὴ ἐγὼ σε παρακαλέσω, ἄλλοι σε ἀδελφοὶ παρακαλοῦσι καὶ ἄλλοι πατέρες. οὗτος δὲ ἐστὶν ἐκδεδομένος τῷ διαβόλῳ διὰ τῶν κοσμικῶν πραγμάτων, καὶ βραχεῖαν ἀναπνεύσας ὥραν, ὡς δραπετεύσας οἰκέτης δεσπότην, παρεγένετο ὠφελῆθῆναι· ἄτοπον οὖν ἦν καταλείψαντας αὐτὸν σοὶ προσδιατρίψαι, σοῦ ἀδιαλείπτως τῇ σωτηρίᾳ σχολάζοντος.
- (11) 『師父の金言アルファベット順集成』モウセス 1
- (12) 同エリアス 7 古谷功訳 p. 151.
- (13) Rubenson [1995] p. 87.
- (14) Rubenson [1995] p. 199. 当該資料全体を伝承する最良のテキストがグルジア語版 (十世紀頃成立) であるため、筆者の語学的能力の制約もあり、本稿では Rubenson による英訳 (Rubenson [1995] pp. 197–232.) に依拠して考察を行う。邦訳文もこの英訳に基づき筆者が重訳したものである。
- (15) 古谷功訳 p. 32.
- (16) 古谷功訳 p. 195.
- (17) 古谷功訳 pp. 229–230.
- (18) Ἐλεγον οἱ γέροντες· Παντὶ τῷ ἐπαναβαίνοντί σοι λογισμῶ λέγε· Ἡμέτερος εἶ, ἢ τῶν ὑπεναντίων; καὶ πάντως ὁμολογήσει.
- (19) Ἡρωτήθη γέρον· Τί ἐστὶν τὸ ἔργον τοῦ μοναχοῦ; Καὶ ἀπεκρίθη· Διάκρισις.
- (20) Rubenson [1995] p. 87.
- (21) Brown [1988] p. 226. 大貫隆 [2000] p. 57. は、悪霊に関する非神話化・内面化が行われている事実を指摘する一方、悪霊論の内面化のみを一面的に強調する事を戒めている。

- (22) 古谷功訳 pp.338–339.
- (23) 古谷功訳 p.386.
- (24) 古谷功訳 p.279.
- (25) パラディオス『ラウソス修道者列伝』22章8節
 Ἴδου γέγονας μοναχός· μένε κατ' ἰδίαν ἵνα καὶ πείραν δαιμόνων λάβῃς.
- (26) Οἴδα, ὅτι ἐν πόνῳ καρδίας ἐστε, πειρασμῶ περιπεσόντες, ἀλλὰ γενναίως ἐνέγκαντες ἔχετε χαράν· ἐὰν γὰρ μὴ ἐπενεχθῆ ὑμῖν πειρασμός, εἴτε φανερώς, εἴτε κρυπτῶς, οὐ δύνασθε λαβεῖν προθήκην ὑπὲρ τὸ μέτρον ὑμῶν. Πάντες γὰρ οἱ ἄγιοι, ὅτε ἠτήσαντο προστεθῆναι αὐτοῖς πίστιν, εὐρέθησαν ἐν πειρασμοῖς· ἐπὶν γὰρ τις λάβῃ εὐλογίαν παρὰ Θεοῦ, εὐθέως προστίθεται αὐτῷ πειρασμός παρὰ τῶν ἐχθρῶν, θελώντων στερῆσαι αὐτὸν τῆς εὐλογίας, ἧς εὐλόγησεν αὐτὸν ὁ Θεός· εἰδότες γὰρ οἱ δαίμονες ὅτι εὐλογουμένη ἡ ψυχὴ προκοπὴν λαμβάνει, ἀντιπαλαίουσιν αὐτῇ, εἴτε ἐν τῷ κρυπτῷ εἴτε ἐν τῷ φανερῷ.
- (27) Καὶ ὑμεῖς τοίνυν, ἀγαπητοί μοι, ἐπειδὴ εὐλογία Κυρίου κατέλαβεν ὑμᾶς, ἐπηκολούθησαν οἱ πειρασμοί. Ὑπομείνατε οὖν ἄχρις ἂν αὐτοὺς παρέλθῃτε· ἐὰν γὰρ αὐτοὺς παρέλθῃτε, μεγάλην προκοπὴν ἔχετε καὶ προσθήκη ἐν πάσαις ταῖς ἀρεταῖς ὑμῶν, καὶ δοθήσεται ὑμῖν μεγάλη ἀγαλλίασις ἐξ οὐρανοῦ, ἣν οὐκ ἔγνωτε.
- (28) Ὅτε οὖν ἡ ψυχὴ ἀναφέρεται ἐκ τοῦ ἕδου, ὅσον ἀκολουθεῖ τῷ Πνεύματι τοῦ Θεοῦ, κατὰ τοσοῦτον ἐπιφέρονται αὐτῇ κατὰ τόπους πειρασμοί, παρερχομένη δὲ τοὺς πειρασμοὺς, γίνεται διορατικὴ καὶ εὐπρέπειαν ἄλλην λαμβάνει. Ὅτε δὲ ἔμελλεν ὁ Ἥλιος ἀναλαμβάνεσθαι, ἐλθὼν εἰς τὸν πρῶτον οὐρανὸν ἐθαύμασεν αὐτοῦ τὸ φῶς, ὅτε δὲ ἐπέβη τὸν δεύτερον τοσοῦτον ἐθαύμασεν, ὡς εἰπεῖν, ὅτι ἐνόμισα ὡς σκότος εἶναι τὸ φῶς τοῦ πρῶτου οὐρανοῦ, καὶ οὕτω τὸν καθ' ἓνα οὐρανὸν τῶν οὐρανῶν. Ἡ ψυχὴ οὖν τῶν τελείων δικαίων προκόπτει καὶ προβαίνει, ἕως οὗ ἀναβῆ εἰς τὸν οὐρανὸν τῶν οὐρανῶν.
- (29) 古谷功訳 p.179. 久松英二 [1994] (特に pp.8–10.) : 修道者が獲得すべき「不動心」(ἀπάθεια)とは「情念の除去」ではなく、むしろ「抗情念性」である。
- (30) 古谷功訳 p.24.
- (31) Ὁ γὰρ Ἀνθώνιος ἔλεγεν ἡμῖν, ὅτι οὐδεὶς ἀπειραστος δυνήσεται εἰσελθεῖν εἰς τὴν βασιλείαν τοῦ Θεοῦ· Καὶ ὁ ἀπόστολος Πέτρος « ἐν ᾧ, φησι, ἀγαλλιᾶσθε, εἰ δέον ἐστί λυπηθέντες ἐν πειρασμοῖς ποικίλοις, ἵνα τὸ δοκίμιον ὑμῶν τῆς πίστεως, πολὺ τιμώτερον χρυσοῦ τοῦ ἀππλυμένου, διὰ πυρὸς δὲ δοκιμαζομένου εὐρεθῆι ». Λέγεται δὲ καὶ περὶ τῶν δένδρων, ὅτι ὑπο τῶν ἀνέμων παρενοχλούμενα πλέον ριζοῦνται καὶ αὐξάνουσι· τὰ αὐτὰ δὲ καὶ οἱ δίκαιοι ὑπομένουσι.
- (32) 古谷功訳 p.24.
- (33) Ἀδελφός τις ἦν ἐν κοινοβίῳ ἡσυχαστῆς, καὶ συνεχῶς ἐκνεῖτο εἰς ὀργήν. Λέγει οὖν ἐν ἑαυτῷ· Ἀπέρχομαι καταμόνας ἀναχωρῶν καὶ ἐν τῷ μὴ ἔχειν με τί ποτε μετὰ τινος, παύεται ἀπ' ἐμοῦ τὸ πάθος. Ἐξελθὼν οὖν, ὤκνησεν ἐν σπηλαίῳ μόνος. Ἐν μιᾷ δὲ τῶν ἡμερῶν, γεμίσας τὸ βαυκάλιον ὕδατος ἔθηκε χαμαὶ καὶ ἐξαίφνης ἐστράφη. Λαβῶν δὲ ἐγέμισεν αὐτὸ, καὶ πάλιν ἐστράφη. Εἶτα τρίτον γεμίσας ἔθηκε, καὶ πάλιν ἐστράφη. Καὶ θυμωθείς, ἐδράξατο αὐτοῦ καὶ ἐκλασεν αὐτό. Εἰς ἑαυτὸν δὲ ἐλθὼν, ἔγνω ὅτι ἐνεπαίχθη ὑπο τοῦ δαίμονος, καὶ εἶπεν· Ἴδου καταμόνας ἀνεχώρησα, καὶ ἠττήθην, ἀπέρχομαι οὖν εἰς κοινοβίον. Πανταχοῦ γὰρ, ἀγώνος χρεῖα καὶ ὑπομονῆς καὶ τῆς τοῦ θεοῦ βοηθείας. Καὶ ἀναστὰς ὑπέστρεψεν εἰς τὸν τόπον αὐτοῦ.
- (34) パラディオス『ラウソス修道者列伝』16章
- (35) 同 35章
- (36) 同 11章, 『エジプト修道者列伝』20章7節, 自己去勢や身体を自己毀損した者を聖職に叙任するこ

とを禁止する教会法令としては、『使徒規律』22条及び23条、『ニカイア教会会議規則』2条などがある。この問題に関する研究としては Carner, D. [1997] がある。

- (37) 師父の金言アルファベット順集成』アントニオス 10
- (38) 同アルセニオス 29
- (39) 同アルセニオス 21
- (40) 古谷功訳 pp.245-246.
- (41) パラディオス『ラウソス修道者列伝』35章。面会室の開室日は土曜日と日曜日であった。
- (42) 同 35章1節 『エジプト修道者列伝』1章 アウグスティヌス『神の国』5巻26章1節
- (43) パラディオス『ラウソス修道者列伝』21章
- (44) アタナシオス『アントニオス伝』69章
- (45) 『伝アントニオス書簡集』第4書簡17節
- (46) ポントスのエウアグリオス『祈りについて』124. Μοναχός ἐστίν, ὁ πάντων χωρισθεὶς, καὶ πᾶσι συνηρησομένους.
- (47) 同 122 Μακάριός ἐστι μοναχός, ὁ πάντων τὴν σωτηρίαν, καὶ προκοπὴν, ὡς οἰκείαν κατὰ πάσης χαρᾶς ὄρων.
- (48) 『エジプト修道者列伝』22章3節
- (49) 『師父の金言アルファベット順集成』ニコン 1
- (50) パラディオス『ラウソス修道者列伝』18章19-21節
- (51) 同 18章22節 葡萄酒・肉類の摂取の自粛は、教会の断食日において規定されたものであった：『ラオディキア教会会議規則』50条『トルロス教会会議規則』56条
- (52) 素行不良な聖職者に対する聖務停止・聖職剥奪を命じる教会法令としては、『使徒規律』42条・43条（飲酒にふける聖職者への）・『ラオディキア教会会議規則』30条（混浴浴場にて入浴する聖職者への）などがある。素行不良な一般信徒に対して断食等を命じる教会法令としては、同1条（再婚者への懲罰としての断食・聖堂参拝の制限など）。テルトゥリアヌス『悔い改めについて』9章及びキュプリアヌス『背教者について』35章（受洗後、姦通・背教等重大な罪を犯した信徒に対する懲罰としての粗衣の着用・入浴自粛・飲食制限など）
- (53) パラディオス『ラウソス修道者列伝』17章11-13節（奇病になやむ訪問者に対する悪霊祓いの一環として7日間の断食を行じるエジプトのマカリオス）同20章10-14節（憑依に苦しむ訪問者のため、砂漠の炎熱の只中で断食断水して悪霊祓いの祈祷をする「単純者」パウロス）
- (54) 大貫隆 [2000] pp60-62. 大貫教授のこの命題に対して、筆者は学位申請論文 (pp.51-52) において「修道者達の禁欲の根底に利他的動機を想定することは、すくなくとも初期の資料から明瞭に結論付けることは可能ではない」との批判を行った。しかし、本稿作成に際し改めて諸資料を検討した結果、この批判は不適切なものであるとの結論に至り、同教授のこの命題に対する批判を撤回するものである。
- (55) ポルビュリオスの禁欲論と悪霊論に関しては、筆者の学位申請論文 pp.12-30 並びに日本宗教学会における口頭発表要旨『新プラトン主義におけるダイモンの悪霊化』（『宗教研究』335号掲載予定）を参照されたい。

Demonology in Early Christian Monasticism

Jun SUZUKI

The rise of Christian monasticism in fourth century C.E. is one of the most significant developments in the religious history of late antiquity. The purpose of this article is to highlight the uniqueness of early monastic asceticism through an analysis of this tradition's demonology.

In early monastic literature, four significant tendencies can be found.

- 1) Spatial representations are generally geometric or horizontal rather than cosmological, and the same viewpoint is found in demonological representations.
- 2) Matters of "practical" import, such as the identification of evil spirits manifest in human emotions, are laid out in a "demonological geography," in which a representation of a desert serves as a battlefield thronged with armies of angels and demons. This representation became the background motif of monastic demonology.
- 3) Incidents of demonic encounter were regarded as important opportunities for spiritual progress, and were viewed positively by monks of this tradition.
- 4) Retreat into the desert by monks was not a product of misanthropy, but was rather intended to actualize a spiritual war against evil spirits and was an attempt to attain salvation for them and lay people in the world.

Compared with other exhortations within demonology that urged a retreat from the material cosmos and contact with the masses, and in contrast to the asceticism of Porphyry the Neo-Platonist and to the Gnostic prescription of ascetic life as the means of world salvation, by maintaining a positive evaluation of demonic experience and a strong commitment to the promotion of the good of world of lay people, early Christian monastic asceticism was one step ahead of its ancient philosophical and religious predecessors.